

文化高知

2004年5月 NO.119



「アメリカファー・春」 南 安 廣

〈もくじ〉

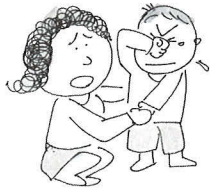
我が子を思う気持ち	吉川明男	2
フルートの聞こえる家	甲藤さち	3
土佐と東北-先覚の系譜	鈴木澁二郎	4~5
第14回高知出版学術賞を審査して	中内光昭	6~7
古本屋「タンボボのあけくれ」について	片岡千歳	8~9
幕末ブーム到来!-歴史を学ぶ楽しさ-	三浦夏樹	10
ジーンズ・ファクトリー・コンテンポラリー・アート・アワードによせて	都築房子	11
かるぼーと新年度事業のご案内・2月~4月の事業のご報告		12~13
風俗歳時記・風伯		14~15

我が子を思う気持ち

吉川明男

最近我が国では、親が子を虐待する
という事件が後を絶たない。中に
は、瀕死の重傷を負わせたり、命ま
で奪ってしまうという衝撃的な事例
もある。

こうした虐待事件の原因や背景は
それぞれ異なっており、一概に論じ
るべきでないことは承知している。



私には、こうした虐待事件の親と
は対極にあるともいえる、やさしく
もたくましい親たちとの忘れられな
い出会いの思い出がある。

しかし少なくとも、古くは万葉集に
「瓜食(は)めば 子ども思ほゆ 栗
食(は)めば まして愚(し)の(は)ゆ
いづくより来(きた)りしものぞ…
…」銀(しろかね)も金(く)がね

二十六年前の晩秋、踏切事故で一
人の児童が不慮の死を遂げた。彼に
は、耳がきこえにくいというハンデ
イがあった。当時も、事故の原因は
定かにされなかった。しかし、もし
彼に難聴という障害がなかったら、
この不幸な事故は起こらなかったで

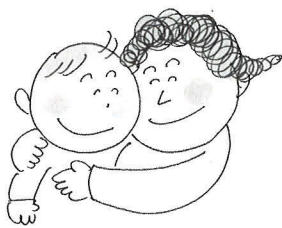
あろう。

通夜から初七日まで、彼の母親は
泣き通しであった。食事もほとんど
のどを通らず、「帰ってきておくれ
もう一度元気な顔を見せておくれ」
とただひたすら泣き、そして祈り続
けた。これまで彼女は我が身を犠牲
にし、我が子を育て上げた。中学校
入学を目前にし、その日を一日千秋
の思いで待ちこがれていた親と子。
その悲しみには想像を絶するものが
あったにちがいない。だれも慰めの
ことばを持たなかった。

私は、昭和四十年代半ばから七年
間、難聴学級「きこえの教室」の担
任として高知市立第六小学校に勤務
した。痛恨の極みともいえるこの教
え子の死からもそうであるが、その
間、教え子の親たちからかけがえの
ない数多くのことを学ばせていただ
いた。

愛する我が子に障害があるとわか
った時の衝撃と将来に対する大きな
不安。幾つもの病院を巡り、相談機
関を訪れ、一分の望みをも絶たれた
時の絶望感。それに続く長い苦渋と
苦悩の日々…なぜ我が子だけ
がと神を恨み、健康な他人の子をう
らやむ…。

しかし、その暗く長いトンネルを
くぐり抜け、殻を突き破ってからの



絵、畠中智恵子

親の強さとたくましさ。私は教室担
任として、こうした親の絶望からの
開き直り、立ち上がりの真剣な生き
ざまをつぶさに見せていただいた。
それに脱帽し、かくありたいと願
い続けた。

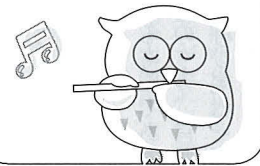
障害児を持つ親の子に対する願
いはただ一つ。「私たち親が死んだ後
でも、強くたくましく自立できる人
間になってほしい」ということであ
る。この目標達成のため、親は見栄
も外聞もかなぐり捨て、我が子のた
めに尽くせるのであろう。

教育長に就任して四か月。本市の
学校教育には課題が山積しているが、
私は、この難聴学級で学んだ親の
「我が子を思う気持ち」を常に念頭
に置き、その負託に応えるよう全力
を尽くしていきたいと決意している。
(よしかわあきお/高知市教育長)

フルートの間へ入る家



甲藤さち



「卓雄よ。おまん、いつまで笛を
吹いて遊びゆうがぜよ」
突如脱サラして家に引き籠もりフ
ルトをさらい始めた父を、明治生
まれの曾祖母がこう言って憂えたの
は昭和四十年代、私が小学生の時の
ことである。

会社勤めの頃から、休日の父は決
まって表の部屋の重い大きな座卓に
向かって何やら勉強してなければ、
フルートを練習していた。私の友達
が遊びに来てこの張りつめた只な
らぬ空気にそのうち皆大人しくなり、
何時の間にかお開きとなった。子供
等の間では怖そうな変わったお父さ
んだった。

小学一年生からピアノの稽古には
毎週通っていたが、父が家でさらう
のや次第が増えてきた通いのお弟子
さん達のフルートの音を毎日聴いて
いるうちに自分も吹いてみたくなっ
た。誰に言われた訳でもないが、自

分は父の子供なのだから何となく習
うのが当然のような気がしていた。

思い切って申し出た時の嬉しそ
うな父の表情を私は見逃さなかったが、
まだ身体が十分出来ていないからす
ぐには駄目だと云う。それから二年
近く待たされ、もう諦めかけていた
朝、突然枕元にフルートが置かれて
あった。父の最初の策略にまんまと
はめられたとも気づかず無邪気に喜
んだ十一歳のクリスマスである。

この時から父は「怖そうなお父さ
ん」ではなく、家で遊んでいると友
達を帰してすぐさま練習を始めさせ
る恐い師匠になった。練習日記を書
くよう言いつけられていたが、さほ
つたり忘れられた日付けの欄には、
翌朝父の字で「自分の頭をナグレ」
とあった。フルートを始めたらピ
アノは辞めさせてもらえないかもしれ
ないという甘い迷惑も見事に外れ、遊
ぶ時間の大幅短縮は必至だった。

林リ子先生が、父を高知初のフ
ルトのレッスン・プロにする為
に会社を辞めるよう命じた時、父には
祖母と妻と三人の子供を抱えた生活
があり、重い選択に苦しんでいた。
遊びに夢中になり、約束通りの練
習が出来てなかったある日のレッス
ン中の事である。

「じゃあ、もう辞めてしまえ！」
と、父は私の楽器を取り上げるとそ
のまま縁側の端に叩きつけた。くの
字に曲がったフルートが庭先の茂み
に落ちていくのを呆然と見ていると、
次にその手は私の頬に飛んできた。
親子断絶は二週間ほどに及んだろ
うか。父と和解をしたかったのかフ
ルトを本当にやりたかったのか
はつきりと思いつけないのだが、な
にしる「これからはちゃんと練習す
るから謝りたい」と自ら母に執り成
しを頼んだ。すると翌日、今まで
使っていたのよりもりっぱな新品の
フルートが手渡されたのである。

九歳離れた小さな妹が父の膝に乗
って何か買って欲しい物をねだって
いる所に行くわした時、何となく見
てはいけないものを見たような気が
したが、淋しいとか羨ましいとかい
う気持ちは起こらなかった。私の父
と、妹の父とは全く別の人だった。
いよいよ家を出て香川県の音楽科

のある高校の寮に入る事が決まった
時、父は表の部屋に私を呼んでいつ
ものように正座させるところ宣うた。
「女だてらに一流の音楽家を目指す
のなら、まともな結婚は出来んと思
えよ」

その言葉は、眠りの森の美女にか
けられた呪いの如く、四半世紀を過
ぎた今もその効力が失われてないら
しい。「人に色々聞かれたら「娘は
オーケストラに嫁に遣りました」と
言うちよいたら？」という私の提案
を気に入って使っていたようだが、
もうそうそう聞いてくれる人もいな
くなっただろう。

曾祖母は私の東京でのレッスン費
稼ぎに母が喫茶を始めるのをあれ程
嫌ったのに、いつしか裏方をせさせ
と手伝い、私の芸大合格を誰よりも
喜んだ。「自分がもうここまでと思
うたら終わりぜよ」と言い、私が上
京した翌年に九十一歳で亡くなった。

「あてはおまんの嫁入までよう生き
ちゅうろうかのう」
「…ほいたら、ちよつと早目にする
き」
かっとうさち/東京交響楽団首
席フルート奏者

土佐と東北—先覚の系譜

鈴木 滉 二郎

ひとつの文化の特徴を捉えるために、そこにだけ光を当ててはならず、他のもう一つの文化をも併せて照射し、相互の反射光で照らし返すことで、さらに陰翳ある文化像が浮かび上がるのではないか。

土佐の地域文化を地域学的観点から研究するという授業で、そうした試みに取り組んでいるが、この方法論をとる上で、もう一つの文化として選んだのは「東北文化」である。その理由は、地理上の位相であり、両地域は、日本列島のちょうど対極にあつて、私の思惑では、いずれも、最初期に現生人類が列島外から渡来してきたところという共通点がある。つまり、南からの黒潮ルートと、大陸と地続きであった北からのマンモスハンターのルートによって、旧石器期以来人々がやって来て住み着き、生活文化が根付いたという仮説に立つての選択である。

東北地方は、かつては決まって暗く重いイメージで語られることが多かった。「白河以北一山百文」などとさげすまれた東北の、さらにその北部は、戦後ですら「日本のチベツト」「物言わぬ農民」などというキーワードで説明された。しかし東北は広く、その文化も実は様々である。広さに関しては、四国全体の面積が、東北六県で最も広い岩手県の面積と大体同じである。広さからだけでは

なく、捉えどころがないのが東北という地域の特徴とも言える。

昨年十二月、高知女子大学主催で「文化とまちづくり」というテーマでシンポジウムを開催した折、パネリストの一人で弘前劇場を主宰する長谷川孝治が、津軽には「神様」という職業があると語っていた。「青森に行つてイエローページを見ると、ひよっとすると神様のページがあるかもしれない」と。この「神様」の生業は、いろいろな相談ごと、特に縁談などの相談を受けて、吉凶を占うものらしいが、東北人が、重要なものごとの判断を他者に委ねるといふのは、特有の傾向のように見える。

恐山のイタコの口寄せのように、巫女とはいえ他人の口を借りて、近親縁者の霊を呼び寄せるといふのは、現代でも東北地方に残る奇習である。山形のオナカマ、福島のパカ、宮城のオガミサマ・・・呼び名はそれぞれ異なるが、今なおこうした盲

目の村巫女が東北各地には存在している。果たしてイエローページには載っているだろうか。

ただ東北でも、こうした民俗的風習が殆んど見られない地域があつてこの地域には暗く閉鎖的な東北の面影はない。その代表的な地域が、偉人・先人のまちを標榜する岩手県水沢を中心とする地域である。

ここが時代の先行者を輩出した理由はさまざまに考えられ、例えばその南接する地域に、十二世紀に絢爛たる奥州藤原文化が築かれた平泉があることや、旧藩時代、伊達と南部という二藩の接する地域にあつて、相互のいわば文化交流が、とらわれない気風を生んだなどという見方も成り立ち得る。事実ことばに関して、水沢弁は、伊達弁と南部弁という異なる方言の接触する地域であるため、お互いの訛りが中和され、東北のズーゾー弁のなかでも比較的標準化した方言である。

そうした見方は、そのいずれもが、

これは以上のような歴史的経緯と無縁ではない。江戸中期、一関藩医建部清庵は、「蘭学事始」を著した杉田玄白と文通して「和蘭医事問答」をまとめ、後に伊達藩主の侍医となる大槻玄沢は、初めこの清庵のもとで学び、その後江戸に出て玄白、前野良沢に蘭学を学んだ。

江戸後期水沢から出た高野長英も明らかにこのような系譜のもとに登場するが、その養父玄斎は、玄白の弟子であり、後述する箕作省吾の師事した坂野長安も蘭医であつた。シボルトの鳴滝塾に学びドクトルの称号を得た長英は、一八三九年、幕府の鎖国政策を批判する「夢物語」を書いて捕われ、永牢の身となつたが、獄中から「万国地理書」百巻の翻訳を願ひ出た。この翻訳は許可されなかつたが、その数年後、長英の同郷の後輩の手で、類書の出版が実現した。

この偉業を成し遂げたのが、やはり水沢出身の箕作省吾である。地図は「新製輿地全図（しんせいよちぜんず）」と称する世界地図、地誌は「坤輿図識（こんよすしき）」といい、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、南北アメリカ、オーストラリアの五誌からなる。鎖国下に長崎経由で輸入され、主に幕府所有となつていた蘭書を始めとする外国書から、省吾が訳述編纂したもので、一八四四年、

四五年に相次いで上梓されている。省吾は、万巻の外国文献を渉猟しつつ短時日で訳述する刻苦がたつた、肺結核に罹り、原稿を咯血で染めるほどの凄絶な訳業であつたが、それを成し遂げ、わずか二十五歳でその生涯を閉じた。この労作は幕末期に広く読まれ、例えば吉田松陰が、長州の野山獄に繋がれながら、講義した際もこの地誌を使ったという。

ところで、先日龍馬を取り上げたNHKのドキュメンタリーで、この「新製輿地全図」を、龍馬が継母の実家である川島家で見つて、外国知識を得たという話が紹介されていた。廻船業を営む川島家の当主猪三郎は、「ヨーロッパ」とあだ名される程の西洋通であつたらしく、万国地図、世界地誌の類の最新の情報を得ていたものようだ。省吾が輿地全図を完成させた年、龍馬は八、九歳。出版後時を経ずして、猪三郎はこれを手に入れたのであろうから、この最新知識を縁者に紹介しないはずはなかつたと推測される。

水沢は、このように近代への芽生えを用意する土地柄であつたため、自由民権運動の起りも東北地方では早く、その中心人物が、後に自由党代議士、水沢町長を務めた下飯坂権三郎であつた。権三郎は、明治となつて間もない一八七一年、新政府の官吏たちが持ち込んできた外国文

おそらく多かれ少なかれ当たつてい

るであろう。しかし私はもつと本質的な理由として、異文化としてのキリスト教や、宣教師がもたらした西洋科学の影響が大きかつたのではないかと考えている。それは伊達正宗の通商政策をきつかけとするものであつた。正宗はスペインとの通商を狙い、一六一三年に支倉常長をヨーロッパに派遣し、常長はスペイン国王やローマ教皇に謁見し、受洗してローマ市民権も与えられたが、帰国後、幕府のキリシタン禁令により、不遇な生涯を送つたとされる。この常長の慶長遣欧使節の頃、西洋の事情に通じているとして正宗の知遇を得、召抱えられて、現在の水沢市福原に千二百石の領地を与えられた後藤寿庵がいる。キリシタンであつた寿庵は、外国人宣教師などから学んだ土木技術をもとに、灌漑用の堰を作り、胆沢平野を肥沃な水田に変え、領民に慕われた。今日でも当時の寿庵堰が、土地を潤している。寿庵の元には、全国から信者が集まり、東北キリスト教の中心となつたが、禁令後は、寿庵も行方知れずとなり、その後その周縁には、隠れキリシタンの郷が存在したと言われる。

現在の宮城県から岩手県南部にかけての仙台、一関、水沢の各藩は、早くから蘭学者、蘭医をもつが、私たちの人となりをインターネットで検索したところ、板垣について「この頃の頃は大変わんぱくだったようです」、後藤に至つては「十一歳頃まではガキ大将で暴れまわつていたことは後々までの語り草であつた」とあり、わんぱくやガキ大将の存在が難しくなつた少子化の今日、さらに教育そのものも、管理システム化して、人間を脆弱化させる一方なのではないかと危惧されるのである。

ところで筆者は、小学校の六年生半ばまでを、父祖の地である水沢で過ごした。学び舎であつた水沢小学校の校歌に「昔思えば名も高き優れし人も住めりけり。世は幾千歳へだつとも、同じ景色のこの里に、人ばかりやは劣るべき、人ばかりやは劣るべき」とあつて、誇り高く高唱した日々が懐かしく思い出される。

土佐こそ近代の黎明期に、躍り出るように無数の先人たちを輩出した土地柄であり、今はその同じ景色の里に住んで、日々教育・研究にたずさわる身であるが、昨年初めての高以来、一瞬も異邦人としての感覚を持つこと無しに過ごし得ている根柢は、或いはこのような文化の類縁性にあるのかもしれない。

（すずきこうじろう／高知女子大 学教授）

第14回

高知出版学術賞を

審査して

中内光昭

「高知出版学術賞」のキーワードは「学術」であるが、本賞では、「学術」が、かなり広い意味で使われていて、「要綱」にもある通り、「啓蒙書」等も含まれている。しかしながら、地域の「優れた学術研究を振興」する、という本賞の主旨には、地道な研究に直接根ざした研究書が、より合致していることは言うまでもない。本年度の十七点の応募作品には、残念ながら、かつてはかぶり見られたような、内容、外観ともに重厚な研究書は少なかった。

この現象を直ちに県下での研究活動や、県外での、高知県に関する研究活動の衰退と結び付けるのは、いささか早計である。もともと「専門書」の購買者数は限られている。まして、「出版不況」である。自費出版か、かなりの経費負担をしない限り、研究業績書の刊行を引き受けてくれる出版社は皆無に近い。研究成果の刊行に対しては、かつては文部省が、現在は日本学術振興会が、「研究成果刊行助成」という「科研費」の枠を設けて助成している。しかしながら、最近の「先端科学」やCOE（中核的研究拠点）への湯水のような税金の投入に比べると、刊行助成は微々たるもので、採用は極めて限定されている。「科学技術」には馴染まない、文系の研究者でも、希望すれば、一生に一度くらい、研究成果の刊行ができるくらいは配慮が望ましい。ひずんだ文教行政がこんなところにも顔を覗かせている。

第一回の審査委員会（八名）で九

点の候補作品を選び、三週間余の精読期間の後で、最終選考を行った。この時点でまず、議論されたのが、「南四国の後期旧石器文化研究」（木村剛朗著）である。本書は、たいへんな労作で、オリジナリティにも富んだ研究と評価された。ただ、木村氏は「四国西南沿海部の先史文化―旧石器・縄文時代―」で、第六回の本賞を受賞されている。本賞は「重賞」を認めてはいるが、今回の研究は、前回受賞の研究の延長線上にあるものと判断され、「重賞」適当とは認定されず、最終的には、次の三点の受賞が決まった（受賞作に順位はない）。

徳岡正三 著
「砂漠化と戦う植物たち」

（研成社 刊）

中国では、毎年、ほぼ東京都と同じ面積の土地が、主に人間の活動が原因で、砂漠化している。この砂漠化を食い止めることは、今や人類にとって喫緊の課題である。

本書は、林学が専門で、中国語が堪能な著者が、度々中国西北部を訪問、滞在した実経験をもとに、砂漠化地帯の現実と自然回復の処方箋を

わかりやすく解説した啓蒙書である。著者によれば、砂漠には自然（気候、地形等）が原因で生まれた元来の「砂漠」と、人間活動により砂漠化した「沙地」があり、後者は草原等への復元が比較的容易である。

植物と環境との関係は複雑にからみあっている。緑復元の場合にも、自然を軽視した、画一的、無機的な発想は、必ず自然からしつべ返しを喰う。植物の本性を良く知った上で、その土地での適木（通常は低木）を適宜組み合わせ、生態系全体に目を注ぎながら育てる必要があることを著者は強調する。

緑化に適した低木十二種についての解説は軽妙で興味深い。著者の生の体験が随所に織り込まれていて、単調になりがちな羅列記載にリズムを与えている。広い視野で自然を眺め、生態系と調和した植林法を説く著者の提言は、かつての林学を知る者にとっては、斬新であり、感銘深い。ユニークで、有意義な啓蒙書として、高く評価された。

永森通雄 著

「ヤナセスキの森から」

（飛鳥 刊）

本県の林業の今後に対し示唆を与え、専門家にも、一般読者にも有益な指針となる、スケールの大きな力作である。

大木基子 著

「自由民権運動と女性」

（ドメス出版 刊）

我が国で、女性解放のさきがけとなった女性たちの歩みを、民権運動とのかかわりで探究、考察したものである。著者は、女性史を概観的に

考察するのではなく、個々の人物の心や活動の軌跡を丹念に追うことにより、揺籃期の女性解放運動をリアルに描きだしている。本書により、一見、同じ方向を指向するように見える、民権運動と女性解放運動が、時には連動しつつも、実は、全く異質のものであることがよくわかる。女性の記録が極めて乏しい中で、岸田俊子、福田英子、清水豊子らの言動や動向を丹念に調べ上げ、それぞれが、彼女らを取り巻く、社会的、家庭的、個人的な環境との関わりあいの中で、思想的に変遷する姿を女性史の視点で考察して、明治思想史の深さを考える上でも貴重な労作と評価された。

叙述は具体的、明解で説得力がある。これまでの自由民権運動研究の欠落部を補い、この時代の歴史の切り口に新しい光を当てるとして高い評価を受けた。

なお、これらの作品と共に、最後まで候補作に残ったのが、鈴木堯士著「寺田寅彦の地球観」である。寅彦の研究業績を、現代の地球科学の視点で再評価したもので、獨創性に富む優れた啓蒙書であると評価された。

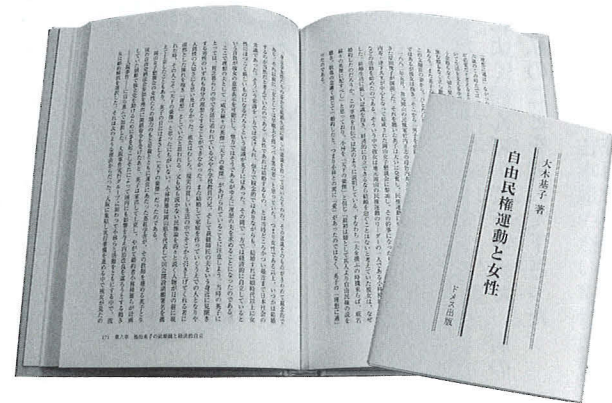
（なかうちみつあき／高知大学元学長）



「砂漠化と戦う植物たち―がんばる低木―」



「ヤナセスキの森から 高知県の林業をおもっ」



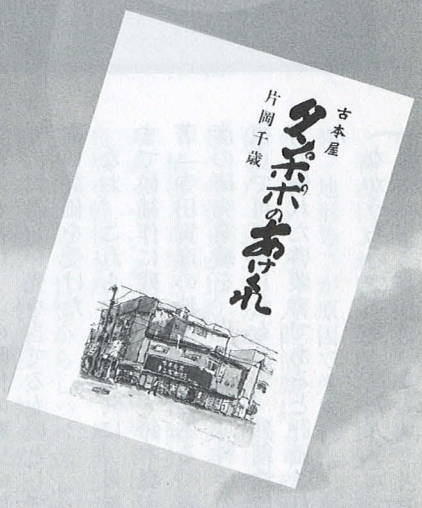
「自由民権運動と女性」

古本屋

「タンポポのおけくれ」

について

片岡千歳



昨年の暮れ、店に來られた青年は、
研修生記者と肩書きのある名刺を差
し出された。

「一昨年、高知市の要のような、
はりまやばしにあった『西武高知店』
が撤退して、この辺りの町の様子が、
如何に変化したか」というような質
問をされた。

私の店のある場所は、『西武』と
は「目と鼻」の間隔と言ってもいい
程なのに、裏通りである。『西武』
が在った頃もさして賑やかな通りで
はなかったが、撤退以後のこの辺り
の「ひっそり感」は目に余る。

「タンポポ書店」が現在の南はり
まや町に移る前に、いまは無くなっ
たが、電停「中ノ橋」南、「中田葬

儀社」前の角地で十年近く営業した。
その実績があつて、裏通りでも細々
現在の場所ですらやってこられたのだと
思う。

記者氏に、昨今のこの裏通りの
「ひっそり感」を言った後で「来年
はこの店を閉じるつもりです」と言
った。

本は重い、本屋は重労働である。
私はひそかに、腰を守るために腹筋
を鍛える運動をしたりして、七十歳
までは古本屋を続けると、早く逝き
すぎた夫に誓いをたてていた。

研修生記者氏が帰られて、今度は
現役の記者氏と共に店に來られた。
おふたりとも数年前に高知新聞に連
載した「タンポポのあけくれ」をじ

つによく読んで下さって、店の
こと私のことを聞いて下さった。

「タンポポ書店」が初夏頃に閉店
するとの記事が夕刊の紙面を大きく
占めたのは、一月の中頃だった。

翌日、しばらく本棚を眺めている、
中年の男性というよりも、おんちゃ
んふうな、たこ焼き屋さんのように、
短い前掛けをしたお客様がいた。

二冊の本を差し出してお金を払っ
て下さったとき、私は思い出した。
「お客様は、もしかして小学生の
頃、お母さんとよく来て下さった方
ではありませんか」

「そうです中ノ橋の店によく行き
ました」

たらかある。もうこんな楽しみは
今回で最後なんだ。さびしいなあ」

「東京の友人も『ぼくらたまの帰
省時どこへ行く？ とんちゃん、セ
ザンス、タンポポは永遠になけりや
あいかん』と葉書を下さった。私も
つらい思いでいます」

「今度は目録だけが楽しみですね」
この方には二回ほど通販目録「タ
ンポポ便り」を送らせていただいた
ことだったが、心から店を閉じるこ
とを惜しんで下さった。

古本屋を見たら、その町の文化が
わかる。又、古本屋のない町には住
めない。

などと言われる人たちがいる。
たしかに古本屋はそこに集まって

「やっぱりそうでしたか、お母さ
んはお元気ですか」

「母は亡くなりました」
私は言葉が無かった。

いつも、お母さんとおしゃべりし
ながら、本を選んでいく可愛い坊や
だった。あの坊やおんちゃんにな
って、お母さんは亡くなってい
たと。

「おばちゃんお店閉めるのお、も
う一度、どうしてもここへ来たかっ
た」

「ここへ来たなら、又女学生になれ
るもん」

てんでにそんな事を言つて、すで
に大学生の息子、娘を持つ二人のお

くる書物を通して、文化を渡し挙げ
ていくような、役目を持っていると
思う。

古本屋自身が言うのはおこがまし
いが、大なり小なり古本屋には、文
化のともしびを掲げていると自負す
るところがある。

それは、利益の追求とともに大切
なことだと思ふ。

高知新聞が、地方のちっぽけな古
本屋が店を閉じることに、異例とも
思えるほどに大きく紙面を割いて下
さったことは、古本屋を一つの文化
とみて、一角に光をあてたと言える
のではないだろうか。

私は、たまたまそこに居合わせて
いたにすぎない。
(かたおかちとせ/タンポポ書店主)

母さんがお菓子を持って来てくれた。
他校の男子学生に絵を頂いたけれ
ど、気が進まないからお返ししたい。
おばちゃんが、それは作品だからと
大切に厚紙で絵を保護して、袋に入
れて送り返すお手伝いをしてくれた
のだと言う。

私の中では遠く流れて消えた事も、
昨日の事のように彼女たちの中で形
作られていて、感激させられた。
そして四十年という時間の流れを、
見せていただいたような気持ちがあ
った。

「いらつしゃいませ」とか「今日
は」などと声を掛けず軽く会釈する
ぐらいが、本を探しにいらつしゃる
方には、邪魔にならなくていいので
はないかと思つている私は、会釈を
返してはつと思ひ出した。

「東京のTBSの方でしたか」
「よく覚えていてくれましたね」
「私のなかに私にしか読めない、
来客名簿がありますから」と私。
県外にいた息子が帰ってきて、接
骨院を開くこと、始めは、家族だけ
でやりたいから、手伝つて欲しいと
言われたこと、その為に、六月には
この店を閉めることとお話した。

「大阪までの出張だったのです。
バスで来たんですけど、ここへ來



今年新年早々市川染五郎さん主演の『竜馬がゆく』（テレビ東京）が放送されたり、NHKの大河ドラマで『新選組』が始まりましたおかげで、幕末ブームが巻き起こっています。昨年には『壬生義士伝』と

④ 学芸員シリーズ

幕末ブーム到来！ — 歴史を学ぶ楽しさ —

三浦 夏樹

この映画もありました。歴史とのかかわり方は人それぞれだと思いますが、最初にかかわりを持つのは小学校の授業が多いでしょうか。「歴史」と聞くと「堅くて難しいもの」という印象を持つ方も多

いと思います。しかし、何も教科書や研究書に書いてあることばかりが歴史ではありません。ドラマや映画、小説、漫画など多くのものに歴史は取り上げられています。これらは学校の歴史の授業が苦手だった人でも簡単に理解でき、楽しめるように工夫して作られており、多くの人に歴史と親しんでもらうのに効果的だと思います。しかし怖いのは創作の部分を事実だと思ひ込むことです。

先日、中学生からこんな質問がメールで寄せられていました。「お正月に放送された『竜馬がゆく』と漫画の『おーい！竜馬』は内容が違う所がありますがどちらが本当ですか？」という質問です。こういう疑問を抱いた時こそ、創作抜きの実史を知ってもらおうチャンスなのです。どんな形でも構いません。「疑問を持つこと！これがまずは大事だと思います。しかし、その答えを導き出すのに、簡単に人に聞いて答えを知ってしまったのは楽しさが半減します。答えを探す過程もまた楽しいものなのです。博物館に足を運んだり、研究書を読んだりしてみてください。史実の龍馬はドラマや漫画に決して負けないくらい面白く、ドラマティックな生き方をしていることが分かるはずですよ。

龍馬が面白い人物というのは今さら言うまでもないことかもしれませんが、調べていると龍馬以外にもこんな面白いものに出会うことがあります。

先日、私が県立図書館で『官武通記』という資料を調べていた時に出会ったものです。龍馬が脱藩した文久二（一八六二）年ごろ（新選組結成前年）の諸藩を魚で評したものが載っていましたので、下に一部をご紹介します。当時の幕府は、久世・安藤政権と言われ、二人の老中が中心でしたが、どのような評価を受けていたのでしょうか？ また、我が土佐藩はどういう魚に例えられ、どういう短評がついているのでしょうか？ ほかにたくさん面白い評があり、どれも射した評だと思いますが、すべてをご紹介できないのが残念です。

歴史は見方によって楽しいことがたくさんあります。まずは、疑問

紀州 御三家の一	ゴマメ	魚の数のみ、取るにたらず
藝州 広島	はりのむきみ	魚の教に入らぬ
水戸	人魚	味はわからない
薩州	鯨（くじら）	動き出しては大騒ぎ
肥後	鰐（わに）の子	成人の後恐るべし
長州	鯉（ひらめ）	作り身にして鯛につぐくなり
阿州 阿波	あなこ	ぬらぬらしても鱈程味がない
会津	鯉（うなぎ）	ぬらぬらしてもうまみあり
宇和島	しゃちほこ	大魚ならねども恐るべし
土佐	鯉節	なくてはならぬ
田安 御三卿の一	池の魚	大海へ出てうろつくばかり
一ツ橋（後に慶喜が將軍に）	鯉（こい）	天に上るもしれず
久世（安藤と共に老中）	車海老	うまみあれども骨が足りない
安藤（坂下門外の変で失脚）	南風に逢った魚	腹わたがくさっている
公儀役人（幕府の役人）	くらげ	目もなし骨もなし

を持つこと！これが大事です。皆さん、今後歴史に関するテレビを見たり本を読んだりする時はぜひ、疑問を持ちながら見てみてください。そして調べるために博物館や図書館

（みうらなつき／高知県立坂本龍馬記念館学芸員）

私は、日頃から芸術は特別なものではなく、心の栄養として不可欠なものだと考えています。特に、大きな悲しみに出会った時にこそ、その必要があると思います。

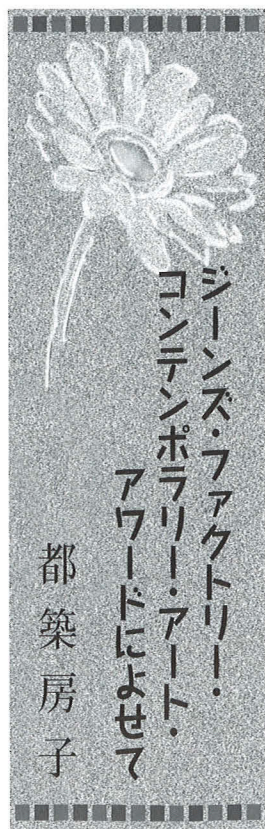
ジーンズ・ファクトリー・コンテンツポラリー・アート・アワードは、一昨年の秋に急逝された中津美枝子さんへの追悼の気持ちから企画され



2003グランプリM賞表彰式

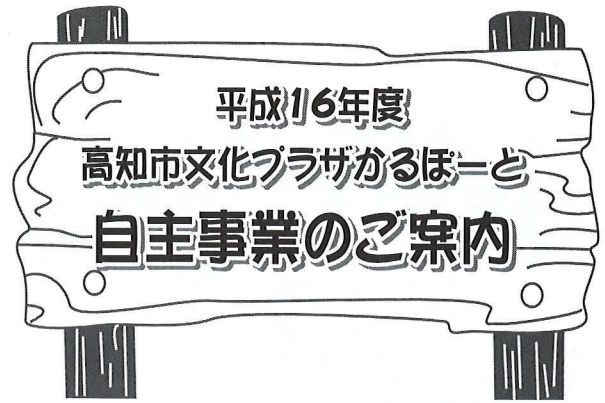
ました。彼女が生前に積極的にかわっていった広告宣伝や、コレクターとして、また企業メセナとしての活動をよく知っていた周りの人々によって、その遺志を引き継ぎ、さらに大きく発展させようということからこの企画が生まれました。若い芸術家を発掘し、育てていこうという地方発信のこの企画は、まさにジーンズ・ファクトリーの具現化で

ありました。昨年の初めから、関係者一同が何度も会合を重ねて、アワードの骨格を作っていました。そして、一企業が行うアワードということでも何かもが手探り状態のなか、四月に募集が開始されました。地方からの発信ということで、企業店舗の立地している高知、香川、岡山に在住している作家を対象としました。そして、六月までの募集期間で二百点を超える応募があり、関係者を喜ばせました。七月五日、六日の一



次審査では、審査員（中津徹、合田佐和子、大木裕之、織田信生、佐藤篤、都築房子）全員による作業が続き、応募された多くのファイルやビデオに目を通していきました。その結果、十一人の入賞者（小倉りさ、坂井淳二、青木卓司、柴田啓子、大島よしふみ、鷹取雅一、松本太一、藤島晃一、井関さおり、MICHAEL KAHN、神崎佐知子）が決定され、八月の最終審査へと進みました。八月十二日から、かるぽーとにおいて実作品の制作と展示が行われました。この最終審査展という形式は、出品者の多くにとって初めての経験で、八月十七日の会期終了まで息の抜けない緊張の連続だったようです。そして、最終日の八月十七日にグランプリM賞として、神崎佐知子・カルマの法則と小倉りさ・JUMP-INの二点が選ばれました。さらに、十一月にグラフィティにおいてグランプリM賞の二人の個展も開催されました。

このようにして、第一回のアワードは地方に住む多くの若い作家たちの関心を集め、大きな盛り上がりがありました。この一連の企画を通して、企業のポリシーが広く伝わっていったことは言うまでもありません。そして、地方に在住の作家にとって大きな励みとなりました。この新しい取り組みがさらに規模を拡大して、今年も計画されています。母体である企業の発展とともに、募集地域が広島にも拡がり、より多くの作品が寄せられてくることを期待されています。今や、文化は中央集権の時代ではありません。このような地方からの発信こそが文化の底辺を拡大し、大きな花を咲かせることができる時代になってきました。今年の第二回アワードではどんな才能が見い出されてくるのか、今からとても楽しみです。新しい時代にあふわしい豊かな表現との出会いが期待されています。（つじまふみこ／造形作家）



◆高知市文化振興事業団創立二十周年記念事業ほか注目のプログラム

かるぽーとの開館三周年と、かるぽーとの管理・運営にあたっては、財団法人高知市文化振興事業団の設立二十周年を記念して、「市民が歌う第九シンフォニー」(十二月十八日(土)・十九日(日) 大ホール)を開催します。指揮者は高知県ゆかりの作曲家・故平井康三郎氏の孫の平井秀明さん。地元オーケストラをベースに、合唱団は一般公募し、大ホールに『歓喜の歌』を響かせます。

高知市文化プラザ かるぽーと 2月～4月の事業のご報告

◆ミュージカル「つばめ」

二月十七日、大ホールで、秋田県田沢湖町を拠点に活動しているわらび座のミュージカル「つばめ」を、わらび座「つばめ」実行委員会との共催で上演しました。

今回の作品は、朝鮮通信使をテーマにジェームス三木が脚本・演出したもので、伝統芸能を取り入れたミュージカル。日本・朝鮮の二国間の関係に翻弄されながらも志高く生きる男女の姿を繊細に描いた感動作で、多くの観客の涙を誘いました。

◆楽器の動物園

かるぽーとをテーマパークに見立て、アトラクションを楽しむ中で楽器に触れ、音楽の楽しさを体験する「楽器の動物園」を、二月二十八日・二十九日、大・小ホール、中央公民館各室を使って開催しました。「楽器の動物園」「楽器の休憩室」

今年のオペラは、モーツァルトの「コシ・ファン・トゥツェ」(九月二十九日(水) 大ホール)。ヨーロッパのオペレッタのメトロポール(首都)と呼ばれるウィーン近郊のバーデン市。その市立劇場から総勢八十人の歌劇団員がやってきます。生演奏による本場オーストリアの熟練の舞台をご堪能ください。今人気のアイリッシュ・ダンス。「トリニティ」(十一月十六日(火) 大ホール)はアメリカ初の世界大会優勝チームで、初来日公演を行います。ニューヨーク・タイムズが「空翔ぶ脚」と評した華麗で驚異的なダンスをぜひご覧ください。アイリッシュ音楽では、「ジャック・キー・デイル」(十一月二十三日(火)・二十四日(水) 小ホール)が来日。アイルランドでは神様とも言われるジャックキーのアカordeイオン演奏にご期待ください。

◆市民とつくる文化事業

高知在住のアーティストに発表の機会を提供する地元アーティストプログラム。第一回目は「フェイク・ジャズ・オーケストラ」コンサート(五月七日(金) 小ホール)。以後七月・九月・二月にも行う予定です。

「打楽器工房」(ちよつと見せて！舞台裏)「かるぽーと探険」(ただ今リハーサル中)「コンサート」の七つのアトラクションに、親子連れや中学・高校の吹奏楽部員など、のべ五千九百五十人が来場し、かるぽーと全体が熱気に包まれました。

楽器の説明や演奏に当たったのは、国内外で活躍中の管楽器・ピアノ奏者十名からなる「マジカル・サウンド」のメンバー。参加者は、音の出る仕組みや楽器の特徴などの説明を聞いたり、楽器に触れて音を出してみたり、身の回りにある素材でパーカッションを手作りしたりと、思い思いに楽しんだ後、最後は大ホールでの本格的なクラシックコンサートを鑑賞して大満足でした。

◆小さなソナタ

子どもを対象に、優れた舞台芸術を生で体験してもらおうという目的で開催している「かるぽーとキッズ

昨年引き続き市民参加で開催するのは「第三回詩のボクシング高知大会」(七月十一日(日) 小ホール)。出場選手、運営ボランティアとも現在募集中です。また、日ごろコンサートに参加する機会が少ない親子連れを対象とした「わいわい子ども音楽会」(六月五日(土) 大ホール)では、和やかな雰囲気の中で生の音をたっぷりと聴いていただきます。

文化庁助成の「本物の舞台芸術体験事業」では松山バレエ団の「くるみ割り人形・全幕」(十一月十日(水) 大ホール)を上演。この公演は、児童・生徒を無料招待するものです。また、十六年度も高知市文化体験プログラム支援事業として、美術・演劇・伝統芸能・まんが・音楽・表現の各分野で、小・中・高校生を対象としたワークショップをのべ十二日間開催します。

このほかにも、子どもを対象とした「キッズ・シアター」や、演劇・ミュージカル等を計画しています。どうぞご期待ください。

◆横山隆一記念まんが館の展覧会

四月から開催している「知る・行く・遊ぶ」日本全国まんが巡り」展(六月二十七日(日))では、「石ノ森萬画館」、「宝塚市立手塚治虫記念館」、「水木しげる記念館」、鳥取県大栄町「名探偵コナンに会える町」など、全国のまんが関連施設や事業を紹介しています。

漫画集団を通して横山隆一とも交流のあった手塚治虫、やなせたかし、ちばてつやらの若き日の作品の原画を展示するのは「日本漫画家協会展(まんが・青春展)」(仮題) (七月十七日(土)～八月三十一日(火)) (予定)。

「高知出身まんが家展」の第三回目としては「タマリン展」(仮題) (十一月十八日(木)～平成十七年二月十三日(日)) (予定) を開催。不慮の事故で早世したタマリンの作品を紹介いたします。

また、高知のまんが文化の裾野を広げるため「地元まんがグループ展」(平成十七年二月二十六日(土)～三月二十七日(日)) (予定) を開催し、高知在住セミプロまんが家の作品を展示します。

シアター」。今回はデンマークを中心に世界中で活動している児童劇団「グループ38」を招聘し、三月六日・七日に小ホールで開催しました。今回の演目はドイツ童話「赤ずきん」に斬新な解釈とアイデアを加えて創られた「小さなソナタ」で、台詞はすべて英語で上演されました。舞台はトラックの荷台。その上に、生きた鶏やタマゴ、ゆでたジャガイモが物語の登場人物として出演するという一風変わった作品でしたが、出演者のコミカルなかけあいや楽しい音楽で、小さなお子さんからお年寄りまで楽しんでいただけました。

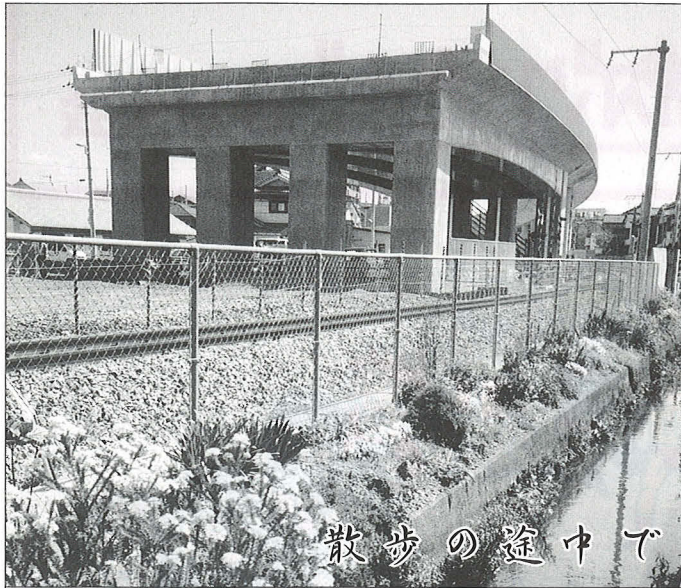
◆関西フィルハーモニー管弦楽団高知公演

三月二十一日、大ホールで、関西フィルハーモニー管弦楽団による「MEET THE CLASSIC IN KOCHI」を開催しました。今回は、社会福祉の増進と競輪に関する理解増進を目的とする日本自転車振興会の補助事業として開催。障害者の方々を無料招待するとともに、国内プロオーケストラの演奏会としては通常の約三分の一の入場料での公演が可能となりました。なじみのある曲目を中心に指揮者の解説も交え、また、指揮者と司会

者の楽しいトーク、お客さまに指揮を体験していただく「指揮者コーナー」もあり、クラシックコンサートにありがちな固いイメージを一変。まさに「MEET THE CLASSIC」、そして、サブタイトルの「ENJOY! オーケストラ」にふさわしい演奏会となりました。

◆まんさいーこうちまんがフェスティバル2004

昨年春、高知市の「まんがによるまちおこし」事業のメイン行事として開催した「こうちまんがフェスティバル2003」。その第二弾として四月三日・四日、「まんさいーこうちまんがフェスティバル2004」を、同実行委員会との共催で、かるぽーととはりまや橋商店街を会場に開催しました。「運営する人も参加する人もみんなが楽しめるものに」というテーマのもと、「まんがで遊ぶ」や「まんが100sec.バトル」「まんがDEから騒ぎ 外国人トークショー」など約三十の催しを行い、両日で約二千人が来場。「どのイベントもスタッフの苦心が感じられた」「多様な催しで面白かった」と、まんがの楽しさを実感していただけました。



散歩の途中で

JR高知駅の東、鉄道高架が伸びてきた。鉄道と交差する新しい道もできつつあり、周辺には新しい建物が続々と建設中。見慣れた風景のすぐとなり、見慣れない風景が出現している。でも、きっとすぐに見慣れてしまうんだろうな。

風仙

未来を暗示させるもの

ところで、桜が蕾のころの樹を煮出して染めると桜色になるのはよく知られていることだが、染織家の志村くみさんのエッセイのなかに、咲いた桜の花で染めてみると、薄緑色になったという話が載っていた。

その染まった色に、桜の花が散り薄緑

今年の桜はいつもより何日か長く花が見られた。開花期に寒気の戻りがあったこと、春先の強い風が吹かなかつたからだが、しかし、今年の桜にあまり有り難みを感じなかつたのは、散り急いでこそ桜なのだ、という先入観のせいだろうか。

色の葉っぱをつけ、秋になるとその葉っぱも落ちて春にはまた蕾をつけるという、自然の周期を伝える暗示を感じたとも書いている。もっといえば、花の時期でもない夏の桜の樹を煮出してみると、秋を予感させる臘脂色になったという。

現在の自然現象のなかに未来が潜んでいるというのは興味深い。人間にしても、現在の自分の姿に、すでに未来の自分の芽があるのは、単に原因と結果というのでは説明できないなにか大きな宇宙の周期のなかに、人も自然も組み込まれているということなのだろう。

十年後、二十年後の自分を暗示させる芽が、いまの自分のなかにあるとしたら、それを煮出して、なんとかその色を見てみたいものである。

(小夜時雨改め春愁)



Original goods Artist goods Ticket

かるぼーとミュージアムショップでは、横山隆一記念まんが館オリジナルグッズをはじめ、県内で活動が続いている作家の作品展示・販売、県下の文化施設で行われる様々なイベントのチケットを取り扱っています。

〒780-8529 高知市九反田 2-1
高知市文化プラザかるぼーと 3階
Tel 088-883-5052
毎週月曜休業（祝休日の場合は営業）
営業時間 10:00~18:00

今号の表紙

「アメリカフー・春」 南 安廣

春先、いまにも新芽が出そうな雰囲気。人間でいえば腕を目いっぱい伸ばしたような、枝ぶりの元気のいいところを見てもらいたい。これからたくさんの葉っぱをつけていくことだろう。

(みなみやすひろ)



高知を撮る パリの薫りを運んできた。

第20回写真コンテスト入賞作品

(平成15年 高知市) 久保田征子

平成15年春、高知市に出店したブランド店の建設中の様子を写したものです。お店は、おしゃれで斬新なデザインのシートですっぽり覆われ、若い女性たちは期待で胸をふくらませました。

新聞に黄砂の到来が報じられると、テレビのコマーシャルで、スギ花粉症のサルがくしゃみをする。日本では、黄砂の季節は、花粉症がひどくなる季節でもある。

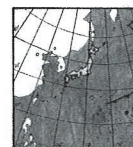
黄砂には、マグネシウム、マンガンなどの酸化物がたくさん含まれているし、北京における最近の観測では、二酸化硫黄と窒素酸化物が急増している。そのため、黄砂によって、気管支炎や喘息が悪化する人もいれば、アレルギー性粘膜炎、過敏性鼻炎などに苦しむ者もいる。

花粉症は、花粉によるアレルギー病とされていて、約五十種類の原因となる花粉が発見されている。日本では、昨今、人口の割以上全花粉症患者の八割が、スギ花粉症に悩まされているという。

花粉が生産地から飛散する条件は、温度、湿度、風によって左右され、とくに、植物の開花期や局地的な気象条件によって、花粉の飛散量が決

医学気象予報

一病気と天気一



風俗歳時記

新聞の天気図の解説や、NHKの気象情報は、近年この種の情報の提供にかなり配慮している。

また、とくに本

参考書「古野正敏・福岡義隆『医学気象予報』(角川書店)二〇〇二」(朴)

まってくる。

このような問題を研究する学問を、生気象学・生気候学という。

生気象学は生物と大気環境の時々刻々の問題を扱い、生気候学は生物と大気環境の多年にわたる関わりを扱う学問である。

そして、これらの学問に基づいて、健康や疾病に関する予報を出し、健康の維持や病気の予防に役立てようとするのが、医学気象予報である。

第3回 詩のボクシング 高知大会

Japan Reading Boxing Association Official Poetry Boxing



詩のボクシングとは？

詩のボクシングとは、ボクシングに見立てたリング上で、2人の朗読者（朗読ボクサー）が、自作の詩または独自の視点で作品化したものを交互に朗読し、どれだけ観客を惹きつけたかを競い合い、複数の審判が判定を下していく〈言葉の格闘技〉です。

「詩」だけでなく、俳句や短歌、川柳、散文、演劇の台本などもOK。つまりことばによる朗読対決なのです。朗読ボクサーが打つのは〈対戦相手〉ではなく、〈観客の心〉なのです。皆さんの参加をお待ちしています。

高知市文化プラザ小ホール

2004年7月11日(日) 開場12:30 開演13:00

※予選会 6月5日(土)14:00より小ホールにて開催(入場無料)

入場料 一般1,500円(1,050円) 中・高校生1,000円(700円) 小学生以下無料

()内の金額は、身障者手帳、療育手帳、障害者手帳所持者とその介護者1名の料金

- 主催：(財)高知市文化振興事業団 ■共催：詩のボクシング高知大会実行委員会
- 後援：高知新聞社・NHK高知放送局・RKC高知放送・KUTVテレビ高知・KSSさんさんテレビ・KCB高知ケーブルテレビ・エフエム高知
- 前売り券販売所：高知市文化プラザ・高新プレイガイド・高知大丸プレイガイド・高知県民文化ホール・県立美術館ミュージアムショップ

参加申し込み・お問い合わせ

(財)高知市文化振興事業団 088-883-5071 bunshin@i-kochi.or.jp

